

安宅の関あたくせき
(網谷一才あみやいつさい)

朗々読終勸進帳 打君吞涙金剛杖
誰忠臣莫動心情 此状使人永不忘

朗々ろうろう 読みよみ 終るおわ 勸進帳かんじんちよう

解説 作り山伏となつて奥州へ向かう義経主従が安宅の関で
関守の富樫にとがめられるが、弁慶の機転で危うく通りぬけ
るといふ歌舞伎勸進帳の典拠。

君をきみ 打ちうち 涙をなみだ 呑むのむ 金剛のこんごう 杖つえ

語釈 ※安宅の関あたくせき 小松市安宅に有つたといふ関。

誰かたれ 忠臣のちゆうしん 心情にしんじよう 動かざるなしうご

※勸進帳かんじんちよう 僧や山伏が民衆から寄付を集める時に読み聞かせ
る事を記し、巻物などにしたもの。※金剛杖こんごうじよう 修験者、巡礼
者などがもつ四角又は八角の白木の杖。※忠臣ちゆうしん 忠義な家来。

此の状このじよう 人をしてひと 永くなが 忘れざらしむわす

通釈 朗々と勸進帳を読み終わるが、関守の富樫にとがめら
れ、涙をこらえて主君義経を金剛杖で打つ弁慶。この忠義な
家来の心情は長く忘れる事が出来ないであろう。